

読書感想文コンクール 個人多読・クラス多読表彰について

〔読書感想文コンクール表彰〕

第48回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1年生からは197編、2年生からは191編、3年生からは14編、4年生からは1編、合計403編の応募がありました。教育支援センター運営委員会の教員7名と国語科教員3名による審査・投票の結果、その中から4名の入選作を決定しました。以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、栄誉をたたえたいと思います。また、惜しくも入選には至りませんでしたが、審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品は佳作とし、その学生の氏名も併せてここに紹介します。

最優秀賞（1名）

1 C 橋浦 希佳さん 「羅生門」で語られる利己心と人間社会 「羅生門」 芥川 龍之介 著

優秀賞（3名）

1 E 畑中 穂希佳さん 今、大切にすべきこと。 「はてしない物語」 ミヒヤエル・エンデ 著

2 S 岩崎 史芳さん 人の別れ—色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年—

「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」 村上 春樹 著

2 I 三原 瑚桜さん 星の温度 「よだかの星」 宮沢 賢治 著

佳作（36名（次の33名及び氏名非公表希望3名））

1 M 櫻井 陽日さん	1 M 辻井 春道さん	1 E 岩田 のどかさん
1 E 川辺 匠人さん	1 E 中村 航 さん	1 S 永井 大翔さん
1 S 森 隆裕さん	1 I 牧野 みおさん	1 I 松本 誠人さん
1 I 村井 友 さん	1 I 渡邊 心陽さん	1 C 角 彩世さん
1 C 戸井 詔 桃佳さん	2 M 影山 和郷さん	2 M 川嶋 夕陽さん
2 M 小路 篤寛さん	2 M 角田 駿之介さん	2 M 仲村 太希さん
2 E 菊山 花音さん	2 E 野口 一柁さん	2 E 平林 大暉さん
2 E 松村 奏佑さん	2 S 大江 翔太さん	2 I 金子 拓夢さん
2 I 谷川 貴一さん	2 C 中川 和奏さん	2 C 三上 梓 さん
2 C 渡邊 周平さん	3 M 岡橋 空輝さん	3 E 岡山 拓未さん
3 I 辻中 日菜さん	3 C 鎌倉 凌輔さん	4 M 石田 眞子さん

読書感想文コンクール表彰式

表彰式は1月8日（水）昼休みに校長室にて行われました。その模様は、図書館からのお知らせに掲載の読書感想文コンクール表彰式ページをご覧ください。



図書館からのお知らせ



（図書館からのお知らせ<https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/information/>）



〔個人多読表彰〕

個個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数が多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

第1位	情報工学科	5年	吉田	彩人さん
第2位	電気工学科	3年	木村	要一さん
第3位	システム創成工学専攻機械制御システムコース1年		阪本	靖大さん
第3位	物質化学工学科	5年	加納	凜太郎さん
第5位	物質化学工学科	5年	中南	琢磨さん
第6位	機械工学科	2年	川嶋	夕陽さん
第7位	情報工学科	1年	高島	誠一朗さん
第8位	情報工学科	5年	前島	由さん
第9位	システム創成工学専攻機械制御システムコース2年		松本	尚樹さん
第10位	物質化学工学科	3年	田口	和哉さん



[クラス多読表彰]

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書の購入ができる権利を贈りました。



第1位	システム創成工学専攻機械制御システムコース1年	(24.5冊／人)
第2位	物質創成工学専攻1年	(11.5冊／人)
第3位	物質化学工学科4年	(9.2冊／人)
第4位	電気工学科4年	(7.6冊／人)
第5位	物質化学工学科3年	(7.2冊／人)
第6位	物質化学工学科5年	(6.8冊／人)
参考：	システム創成工学専攻電気電子システムコース1年	(8.3冊／人) ※
(※) 専攻科のクラスが上位5位までに3クラス以上入っていた場合、専攻科は上位2クラスに制限し、本科から上位4クラス、合計6クラスとする		

全クラスの貸出冊数は「奈良高専図書館 多読表彰ページ」をご参照ください。
<https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/event/tadoku/>



多読表彰ページ

令和6年度

読書感想文コンクールを終えて

《最優秀賞について》

1Cの橋浦さんは、芥川龍之介の「羅生門」を取りあげてくれました。高校国語の教科書でも定番教材として採用され続けている、芥川の代表作です。作品では、下人と老婆の取った利己的な行動の残酷さに目を向けながら、それを道徳的な立場からの批判に終始することなく、自身も下人や老婆のようにありうることを省み、さらには人間社会の現実の姿を物語から照射してくれました。橋浦さんの読書は、「人間の生き方の暗い部分に目を向けさせられ、過去に対する自信がなくなり、これから先の人生が少し不安になった」一方で、「現実と自分の生き方に冷静な視点を持てるようになった」と述べてくれているように、自分の価値観に揺さぶりがかけられ、そこから自分なりの思考を立ち上げていく、得難い経験であったことと思います。

《優秀賞について》

1Eの畑中さんが読んでくれた本は、ファンタジー作品として現代でも読み継がれている、エンデの「はてし

ない物語」です。感想文は、「慣れ」によって見落としがち大切なことを、物語の少年バスチアンに寄り添い、冒険を共に経験することで、改めて気付く契機としてくれたものでした。畑中さんの言う大切なものとは、自由な想像力、「本当」の友達、ありのままの自分の三つです。「日々の生活を豊かにすること」であるこれらを見失わせてしまう社会を見つめ、豊かに生きるために必要なものを保ち続けようとする姿勢を、畑中さんの感想文は示してくれています。畑中さんにとって、この度の読書経験は、自分の生き方の再発見を促してくれたものだったろうと思います。作文として、文章の表現は簡潔であり、構成もよく整理されたもので、優秀作にふさわしい感想文でした。

2Sの岩崎さんが取りあげてくれた本は、世界的にも広く読まれている作家村上春樹の「色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年」です。物語世界の中で描かれる「別れ」を手掛かりに、岩崎さんなりに「別れ」を再考してくれたものでした。別れることには恐れが伴う。しかし、作品が描く別れには、美しく綺麗なところがあります。岩崎さんは、そこから、別れによる束縛からの解放、自由の獲得を読み取ってくれました。別れが持つネガティブな側面を引き受けつつ、新しい世界へ踏み出すための一歩というポジティブな意味合いを見出し、これからの別れに備えようと心に決めてくれています。新たな視点の獲得という意味で、この作品との出会いは意義深いものとなったことと思います。作文としては、この先を読みたいと思わせる書き出しと話の運び方、そして考えを言い表すための言葉遣いに工夫を凝らしてくれた作品でした。

2Iの三原さんは、詩人であり童話作家でもある宮沢賢治の著作から、「よだかの星」を選んでくれました。作品では、物語の結末についての解釈を述べながら、自ら選び取ったこれからの生き方を、ありのままの言葉で表明してくれています。よだかとは違って、誰かと関わらざるをえないこの世間で生きることを、等身大の姿で受け止めながら、よだかにならって、力を尽くすことを宣言してくれた言葉は、書き手の力強さを感じさせてくれるものでした。また、三原さんはこの物語をたびたび再読してくれるほどであるといい、この度の感想文は、その営みの賜物であるように思いました。優しいよだかの、星の世界に救いを得た姿に思い至った時、「妙に晴れ晴れした気持ちになった」という感覚は、物語の再読を経てたどり着いた大切な気づきであり、読書人には共感できるところがあるものです。三原さんには、これからもこの物語を読み返してもらいながら、その都度の新たな発見を得てもらいたいと思います。

《全体について》

今回の読書感想文コンクールでも、多彩な作品が数多く寄せられました。応募作に目を通しながら、まず思ったことは、学生の皆さんの選書の多様さです。夏目漱石や芥川龍之介、志賀直哉、太宰治などといった有名どころはやはり健在。現代の作家でも、梨木香歩や宮部みゆき、東野圭吾、辻村深月あたりは根強い人気でした。映画やドラマ、漫画、SNSなどをきっかけに、その原作の本を選んでくれた学生も複数いました。また、例年通り科学関連の選書も散見され、その外、エッセイ集や、伝記、体験記、自己啓発書など、さまざまジャンルに亘りました。

それぞれが興味を惹かれた本を読み、その読書体験から得られた思い・考えを、感想文としてまとめてくれました。文章を書くのが得意な人は（きっと）楽しみながら、苦手な人は（おそらく）苦心しながら、原稿用紙と向き合ってくれたのではないかと思います。

さて、感想文を書く時に、友人と感想を話し合う時とは違う難しさを感じていた人はいないでしょうか。書きたいことがあるはずなのに表現が見つからない、表現してみたもののうまく言い表せていないような気がする、もっと書きたいことがあるのにまとまらない、など。これは、言葉を扱うことに注意を向けてくれたからこそ感じる難しさです。決して悪いものではありません。この関心を持ちながら書くことで、皆さん自身の言葉を育むきっかけになります。

次回の読書感想文コンクールに応募する学生には、この難しさと辛抱強く付き合いながら、語彙や表現をどう使うか、どう工夫するかと思いめぐらせつつ筆を執って、いい作品を仕上げていてもらいたいと思います。力作をお待ちしています。

（国語・藤井）